

自分史における系統性研究

荒木 豊

学校体育研究同志会との出会い

学校体育研究同志会（以下、同志会とする）との出会いは、1957（昭和32）年頃であるが、仲間として本格的にやる気をもって活動に参加するようになったのは1958（昭和33）年以降である。

同志会へ参加するキッカケを作ってくれたのは、大学時代に同じラグビー部で苦楽を共にして活動した仲間の根本誠氏（創立者の丹下保夫氏と同郷の茨城・日立太田の出身）である。根本氏とは大学時代からの畏友・心友であり、何事も心おきなく話し合える仲で、出席の代返・替え玉受験などもあったように記憶しているが、彼の執拗な勧誘に根負けしたと言っても良いかもしれない。

仲間として一緒に勉強していく中でまず驚いたのは、学習意欲の旺盛さと貪欲さである。そして物事に対する

真摯な研究姿勢と信念にも似たひたむきな取り組みである。最後には、体育の世界はオモシロ・オカシクおもしろかに生きていけば……と考えていた筆者の研究姿勢の甘さに愕然とすると同時に強く反省させられた。というのは、日本の体育が今後向かうべき方向は何かとか、教育における体育の役割は何か、世界情勢の中で日本の体育・教育のめざすものは何か、など、初めて聞くとき全く雲の上の話のようだが、滔々と語られているのである。それに加えて丹下氏の茨城弁の灰汁の強さに辟易させられ、日本語が全くといっていいほど理解できず、終了後毎回のよう根本氏に飲み屋で解説してもらわないと理

解できなかった。そのことは研究会のストレスの解消につながっていたのではなからうか。

同志会との出会いによって学んだ一つひとつのことが、後に山梨大学学芸学部（後に教育学部、現・人間教育学部）に赴任した後の研究姿勢や研究視野の開拓に大きく貢献したものと考えている。

同志会で学んだこと

同志会員として本格的に研究に携わるようになって特に感じたのは、今まで（大学時代）の不勉強と体育の中から世間を見ようとしていた視野の狭さに慙愧の念に強かされたこと、そして科学的視野の乏しさに目を見開かされたことであろう。即ち、今まであまり聞いたことのない「本質論・認識論」とか「教科の存在・教育の内容研究」はたまた「弁証法的唯物論」とか「科学における認識」だとか、暫くは論戦の空中戦を聞いているようで、自分の不明を恥じることばかりであった。

当時の丹下氏、瀬畑四郎氏、中村敏雄氏、吉崎（現伊藤）高弘氏、根本誠氏など皆物凄く個性的であったが、他人の発言にはよく耳を傾けて集中していた。中でも記憶力抜群の中村氏、視座の広い吉崎氏、発想の豊かな瀬畑氏、

そしてややあつて鈴木善雄氏、高山（現永井）博氏らが参加し、川口智久氏がアメリカ留学から帰国されて例会に参加されるようになって、会の研究が活性化すると同時に、ドル平の研究を初め、教材研究の発展と深化に加速がついてきたと記憶している。

指導の系統性研究と系統性の創造的発表

指導の「系統性」とは、一言で述べれば「基本的な指導のすじ道、大まかな指導の順序性」を意味するが、論理的には「運動文化（狭い意味では教材）の本質に根ざした、科学的論理と発達認識に照応する形で順序づけられた中身」を意味する。

具体的な授業（学習）展開では、学習する内容を子どもたちの発達・認識に合致するように、内容を具体的に順序づけられた内容と一定の方法を意味する。

体育の指導では運動文化の本質、即ちスポーツのもつ特性や本質的構造をどのように捉えるかによって、系統性の考え方が変わるし、発達・認識のプロセスをどのように捉えるかによって、系統性の順序づけと内容が変わってくる。教師の系統性の理解と把握は、授業における子どもたちの発達・認識を保障し、直接的に影響を及ぼ